

センター試験当日までに確認しておきたいこと

2015 年度センター試験の主な変更点

2015 年度センター試験は、数学と理科で新課程に対応した出題となり、特に理科は科目構成や実施方法が大きく変わる。また、1年限りで行われる旧課程履修者への経過措置の実施に伴い、科目冊子の形態や試験場の指定にも変更点があるため、注意が必要だ。

科目構成については、物理、化学、生物、地学4領域からそれぞれ基礎を付した科目(以下、基礎科目)と、基礎を付さない科目(以下、専門科目)が計8科目出題され、基礎科目が理科①、専門科目が理科②と別々の時間帯で実施される。試験時間と配点は、理科①が60分で2科目(計100点)、理科②が1科目選択の場合は60分(100点)、2科目選択の場合は130分(うち解答時間120分、計200点)となる。受験生は事前に申請したA～Dの4パターンのいずれかを受験し、試験当日に科目選択方法を変更することはできない。

新課程センター試験 理科出題科目と選択方法

グループ	出題科目	配点(試験時間)	科目選択方法
理科①	物理基礎 化学基礎 生物基礎 地学基礎	2科目100点 (60分)	以下4パターンから選択 A: 理科①から2科目 B: 理科②から1科目 C: 理科①から2科目及び 理科②から1科目 D: 理科②から2科目
理科②	物理 化学 生物 地学	1科目100点 (60分) 2科目200点 (130分)	

* 大学入試センター資料。

* 理科①は1科目のみの受験は不可。

* 理科②は旧課程履修者用の科目も別途出題。

また、旧課程履修者への経過措置として、数学は「旧数学I」、「旧数学I・旧数学A」、「旧数学 II・旧数学B」、理科は「理科総合A」、「理科総合B」、「物理I」、「化学I」、「生物I」、「地学I」が出題される。旧課程履修者は新課程、旧課程のどちらかを選択することができるが、現役生は旧課程の問題を選択することができない。数学は、新旧が合本となっているため、現役生が誤って旧課程の問題を解いてしまわないよう注意が必要だ。一方、理科は、新旧の問題冊子が別々になることに併せて試験室も別々に設定される。同時に、複数の試験場を「グループ化」し、1つの仮想試験場と考え、受験生を割り当てる方式も都道府県によっては導入される。同一の高校で、受験パターンによって試験場が別々になる可能性もあるため、注意したい。

なお、得点調整の対象教科・科目は以下となる。

- (1) 地理歴史の「世界史B」、「日本史B」、「地理B」の間
- (2) 公民の「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」の間
- (3) 数学のグループ①の「数学I・数学A」と「旧数学I・旧数学A」の間

(4) 数学のグループ②の「数学 II・数学B」と「旧数学 II・旧数学B」の間

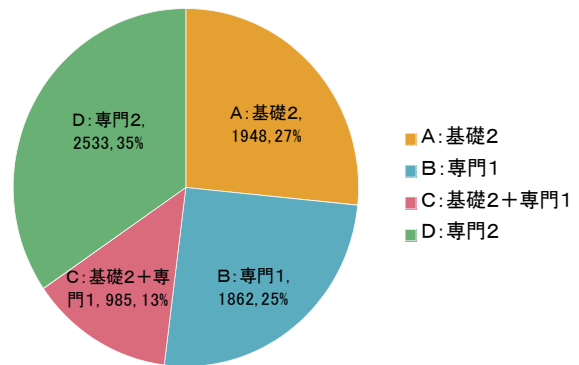
(5) 理科のグループ②の「物理」、「化学」、「生物」、「地学」、「物理I」、「化学I」、「生物I」、「地学I」の間

ただし、受験者数が1万人未満の科目は得点調整の対象外となる。

各大学のセンター試験理科の受験パターン指定状況

国公立大のセンター試験理科の受験パターン指定状況は以下の通りである。理科の受験パターンの指定は、文系学部と理系学部とで概ね傾向が分かれた。

センター試験理科受験パターン別 出願可能な募集単位



* 2014年8月4日時点。弊社調べ。

* 国公立大の全日程。

* 複数のパターンを指定する募集単位は重複して数えた。

文系学部はほぼすべてが基礎2科目を指定した。ただし、専門1科目、もしくは専門2科目で代替することも可能としている。唯一、例外は神戸大・発達科学(人間環境)のみで、前期の文科系方式と後期の小論文方式では専門科目での代替は認められない。なお、基礎2科目と専門1科目を両方受験した場合、ほとんどの大学は高得点の科目を採用するが、埼玉大、名古屋大、札幌市立大、島根県立大の一部学部は基礎科目を優先、北海道教育大の一部校舎は専門科目を優先するといったように、例外も一部あるため、志望者は事前に理解しておきたい。

一方、理系は多くが専門2科目のみを指定しているが、一部の募集単位で、基礎2科目+専門1科目の受験を認めているケースもある。また、基礎科目と専門科目とで同一名称科目を組み合わせた受験を認めるかどうかは、各大学で判断が分かっているため、あらかじめ確認しておきたい。

その他のセンター試験情報は、『データネットホームページ』に掲載しています。

データネット 2015

検索